

梅川忠兵衛の話<摘録>

今谷久平（渥美清太郎）

<出典：「演芸画報」、大正15年11月>

（前略）

梅川忠兵衛は、事実あった三面記事であるが、これを脚色した戯曲に、二つの優れたものがある。一つ近松門左衛門の『冥土の飛脚』で、正徳元年三月に、竹本座へかかったものです。これも近頃は原作のままで、二三度上演されているが八右衛門が立役になっているものであります。羽左衛門の忠兵衛、雀右衛門の梅川、仁左衛門の八右衛門、歌舞伎座で出した事もある。

一つは紀海音の作で、正徳三年七月に豊竹座へかかった『傾城三度笠』である。これも『冥土の飛脚』に劣らぬ傑作で、いつぞや菊五郎の忠兵衛に吉右衛門が利右衛門という友達をして、市村座の舞台にかけ、大そう評判が好うございました。

『冥土の飛脚』が改作されて、『恋飛脚大和往来』になったのは、いつの事だか判然いたしません。併し、宝暦七年七月には、既に大阪の大西芝居で演って居りますから、随分早くから歌舞伎に侵入した訳です。『天網島』が改作されたよりも、ズッと早い事になります。もし、この宝暦七年が改作の初演だとすると、改作者は有名な並木正三という事になる訳です。よし又これより前にしても、宝暦時代に上演された歌舞伎劇が、いまだに舞台へ現われる訳ですから、えらいものです。

『恋飛脚』は、近頃は『こいびきゃく』と読んでいますが、これは『こいのたより』と読むのではないかと思います。古い脚本には、そう仮名が振ってあります。

『恋飛脚大和往来』が江戸へ入ってきたのはあまり古くはありません。尤も梅川忠兵衛の狂言は随分沢山ありますし、新口村の件だけは、お千代半兵衛に改作されて、其まま演じられた事もありますが、封切が大阪其ままで江戸の舞台にかかったのは、文政七年三月、市村座が最初だろうと思われれます。

（中略）

後になると、封切の前に、『生玉神社境内』と『亀屋見世』とが附くようになりました。これは単に筋を売る為と、二番目狂言の序幕が、賑やかにしなければならぬ慣例が出来たところから、後に付けられたもので、忠兵衛の放蕩と、許嫁のおすわの貞節などを見せる場であります。

江戸で出来た『恋飛脚廓假名文』という梅忠がありますが、これは例の南北が、深川の世界に直したもので、梅川は深川の女郎、忠兵衛は江戸の飛脚屋で、封切に稍原作の梯があるばかり、まるで違ったものですが、清元に残っている梅忠は、この時に出来たものであります。